

第 27 回小児リウマチ学会学術集会は 10 月 6 日～8 日まで京都市の京都リサーチパークで行われた。昨年は付着部炎・脊椎関節炎領域の話題が少なかったが、今回はシンポジウムに加え一般演題 5 つとディスカッションも多く、話題の 1 つとして扱われた。

シンポジウムは「本邦における脊椎関節炎関連疾患の第二の夜明け」と題して、学会初日の夕方に行われた。名古屋市立大学皮膚科の森田明理先生による「乾癬性関節炎-皮膚科からのアプローチ」、兵庫医科大学内科学講座リウマチ・膠原病科の佐野統先生による「体軸性脊椎関節炎の診断・治療の最近の動向」、秋岡による「若年性特発性関節炎と小児期の脊椎関節炎」の、3 人の専門家による講演の形で構成された。いずれも教育的で、本邦における小児・若年期の脊椎関節炎関連疾患の課題を浮き彫りした内容であった。

一般演題では以下の 5 題、「川崎病の経過中に認めた関節症状を契機に診断した若年性乾癬性関節炎の 1 例」（京都府立医大）、「当施設における小児期発症脊椎関節炎の臨床像の検討」（京都府立医大）、「当科における若年性強直性脊椎炎の 2 症例の検討」（鳥取大）、「多関節型 JIA の初期診断後に仙腸関節炎が明瞭となり、アダリムマブ投与が著効した若年性強直性脊椎炎の 1 例」（静岡こども病院）、「幼児期発症の強直性脊椎炎」（新潟大）が口演あるいはポスター発表された。本領域に関する演題発表が全国の様々な施設から行われるようになり診療の拡がりを実感されると共に、多発性付着部炎から強直性脊椎炎に至る **spectrum disorder** としての脊椎関節炎関連疾患の存在を、本邦小児・若年期においても再認識させられた学会発表であった。

来年、第 28 回の学術集会は 10 月 26 日から 28 日まで東京・御茶ノ水で行われる予定である。付着部炎を中心とした講演や一般演題がさらに増えることが望まれる。